

ミヒャエル・エンデ著

「ジム・クノッフと荒くれ13」のマンダラ

小林良孝

第1章 序

1983年に初版が出版された M. Ende の最初の出世作 »Jim Knopf und die Wilde 13« の中には、国名としての「マンダラ」(Mandala)、及びこの国名の形容詞「マンダラの」(mandalanisch) という語がきわめて多く用いられている。例をあげれば次の通りである。

第1章の中には、

しかし今回は、彼女はジムのためにいとも美しいマンダラの絵の具箱を持ってきていた⁽¹⁾。

第2章の中には、

以前には時々郵便船が来るだけだったけれども、我々がマンダラと外交関係を持って以来、ここでの船の往来は非常に頻繁になったのである。ほとんど毎月のように、マンダラの皇帝にして我が尊敬する友プング・ギングの大型御用船がやって来ているのである⁽²⁾。

第3章の中には、

「もし偶然にもマンダラの方へいらっしゃるのでしたら、ジムとルーカスとリ・シをも一緒に連れて行っていただけないかしら。」と、ヴァース婦人はたずねた⁽³⁾。

第4章の中には、

「そうじゃないんだよ、小さなお嬢さん。私たちは今、遠いマンダラのそのまた先へ旅している途中なんだよ。」と、ルーカスはニヤニヤ笑いながら答えた⁽⁴⁾。

第10章の中には、

そう、その当時彼は、マンダラでのサーカスの興行のとき、この出し物で

おおいに人気を博したのであった⁽⁵⁾。

第12章の中には、

「あれはマンダラだよ！」と、ジムは上体を起して言った。……まるでおもちやのように小さかったけれども、マンダラの首都ピングが彼らの眼下をスーッと過ぎ去っていった⁽⁶⁾。

第16章の中には、

それから、いくつもの丘の上をまるで赤いひものように長々と続いているマンダラの長城がはっきり見えてきた。そのむこうには、畑や街路や川や太鼓橋などのあるマンダラの国が広がっていた⁽⁷⁾。

第20章の中には、

「今日は、私の尊敬する友人にして、私の娘の命の恩人さん！」マンダラの皇帝のよくひびく声が聞えてきた。「あなたとあなたの小さい友人のジムに、重要なそして嬉しいお知らせがあるのです。」⁽⁸⁾

第21章の中には、

夕ご飯の後、ジムとリ・シは宮殿の中を散歩して、長い巻き毛のおとなしい紫水牛に餌をやったり、ひふが水のしたたる月光のようにキラキラひかっているマンダラの一角獣に餌をやったりした⁽⁹⁾。

第25章の中には、

ようやく出発の準備が全部ととのった時、ジムの前に1人の海賊が進み出てきて告げた。「これでおれたちは準備ができやしたぜ。どっちへ行けばいいんですかい？」

「マンダラへ。」とジムが言った⁽¹⁰⁾。

第26章の中には、

ピング・ポングはただちに、帆であれ櫂であれ、その類のものを備えているものなら何であれ、つまりマンダラの船という船を全部かき集めて、遭難した水夫たちや、できれば「荒くれ13」に捕えられた水夫たちを、捜索するために出航する指図をしたのであった⁽¹¹⁾。

第27章の中には、

「いいえ、それは『絶対に開かない』錠で、昔々マンダラの名工が作ったものなのです。」と、皇帝は真剣に答えた⁽¹²⁾。

第29章の中には、

マンダラからそこへ行くには、国の御用船でさえ何日もかかっていたのである⁽¹³⁾。

そして、第 30 章に当る最終章には、

その 2 人の御子が花婿・花嫁の衣装を着せてもらい終ると、マンダラの皇帝はその広い広場を 2 人の方へシズシズとあゆんで行った⁽¹⁴⁾。

以上のように、エンデのこの作品の中には、「マンダラ」および「マンダラの」という言葉が、最初の章から最後の章に至るまで、ほとんど全章にわたって満遍なく語られているのである。当然のことながら、エンデのこの言葉は、はたして本来の仏教用語としてのマンダラ（曼荼羅）と何か関係があるのであろうかという疑問・興味にかられる。

本来、マンダラ（サンスクリットの mandala）という語は、「本質保持」、「神髓具足」、あるいは「本質成就」という意味を持ち、紀元後 600 年代以降インドで興ったタントラ仏教において、その教義の神髓を表わす語として用いられ始めたものである。タントラ仏教は、間をおかずチベットへ伝えられ、今日のラマ教として今日に至っている。チベットへ伝えられたタントラ仏教は、更に中国へ伝えられて中国密教となった。その中国密教は、806 年（延暦 25 年）空海によって日本へ請来されて、真言宗として今日に至っているのである。これらのタントリズム系の仏教においては、マンダラは祭壇として築かれ、あるいは寺院の壁画として描かれ、あるいは図絵として描かれて本堂に掛けられ、修法の際に用いられているものである。804 年に入唐した空海は、805 年に密教の第 7 祖恵果を青竜寺に訪ねた。来訪を受けた恵果は、初対面の空海にたて続けに金剛界と胎蔵界の伝法灌頂を授け、806 年の帰国に際しては数々の密教の法具を付託したのである。こうして空海が日本へ請来した密教法具の中には、金剛界曼荼羅と胎蔵曼荼羅のいわゆる両界曼荼羅があった。筆者がマンダラという言葉で思い出すのは、この密教法具としての曼荼羅図絵なのである。

曼荼羅にもいろいろ種類があるが、その一つに、^{とえ}都会曼荼羅と別尊曼荼羅に分ける分け方がある。都会曼荼羅というのは、胎蔵曼荼羅や金剛界曼荼羅などがこれの代表的なものであるが、摩訶毘盧遮那如来すなわち大日如来を中心に置いて、その眷族全尊を集めて描いたものである。他方、別尊曼荼羅というのは、釈迦如来とか薬師如来とか大元帥明王などの一尊を中心に置いて、その尊特有の徳を描いたものである。

エンデの「ジム・クノッフと荒くれ 13」を初めて通読した時、この物語の中で「マンダラ」という言葉が頻繁に使用されていることに、まず驚かされた。この「マンダラ」という言葉は、仏教用語としての本来の曼荼羅の意味をふまえた上で使用されているのであろうか。もしそうだとしたらその言葉の正しい

理解の上で使用されているのであろうか。あるいは、単なるエキゾチックな言葉遊びに過ぎないのであろうか。この疑問が本稿の発端であり、この疑問に答を出すことが本稿の課題である。

結論を先取りして言えば、エンデのこの物語の中の「マングラ」および「マングラの」という言葉は、単なる言葉遊びではない。またその意味をはき違えて使用しているのでもない、「ジム・クノッフと荒くれ13」の構造は、おおまかに言えば胎蔵曼荼羅の構造ときわめてよく似ていると言えるのである。勿論、「ジム・クノッフと荒くれ13」は、キリスト教王国の隆盛を語ったものであり、胎蔵曼荼羅は仏教王国の隆盛を表現したものであるから、性格面での根本的な相違もあるし、最終目的の達成（これは曼荼羅図で言えば最外院すなわち外金剛部院）に至るまでの過程の設定の仕方においては粗密の差はある。しかしこの両者は、構造の点ではよく似ているのである。この構造的な類似性を、「ジム・クノッフと荒くれ13」を本稿でマングラ図化することによって明らかにすることにしよう。

「ジム・クノッフと荒くれ13」をマングラ図化する作業に入る前に、その模範・基準となる胎蔵曼荼羅の構造を確認しておかなければならない⁽¹⁵⁾。

胎蔵曼荼羅は12の院に分けられ、この12院はそのはたす機能によって4種類に分けられている。中台八葉院、初重の院、第二重の院、第三重の院の4種類である。

中心にある一つの院が中台八葉院である。この院の中核には、この曼荼羅全体の主尊である自性法身・大悲大日如来が置かれている。大日如来の法界体性智は宝幢如来の大円鏡智、天鼓雷音如来の成所作智、無量寿如来の妙観察智、開敷華王如来の平等性智の四智に特異化されて開示されている。そして、大日如来の初重、第二重、第三重への自己展開エネルギーは、行を象徴する普賢、弥勒、観自在、文殊の四菩薩によって開示されている。要するに、中台八葉院は、大日如来が本来具有している大悲、四智、行動力を最も元始的な形で、1体構造で総合的に開示したものである。

この外側の初重と二重を構成している10個の院は、衆生済度を実現するための方便を、細分化と再統合の2種類の方便に分けて究竟したものである。

まず、中台八葉院を四方向からとり囲んで初重を構成している遍知院、蓮華部院、持明院、金剛手院の四つの院は、中台八葉院の中の法界体性智を四如来の四智に細分化した上で、更に1段階だけ最外院の側へ降ろしたものである。と同時に、大日如来の心の根本である大悲心を悲心と慈心に分けて、蓮華部院

の諸尊によって悲心（抜苦）を究竟し、金剛手院の諸尊によって慈心（与楽）を究竟したものである。つまり初重のこれら四つの院は、大日如来の法界体性智（菩提心）と大悲心を衆生に伝えるため、細分化の方法によって方便を究竟したものである。

これに対して初重をとり囲んでいる第二重の六つの院は、すなわち釈迦院・文殊院、地藏院、虚空蔵院・蘇悉地院、除蓋障院は、初重の院で細分化された大日如来の法界体性智（菩提心）と大悲心を再統合して大日如来の一切智智を、すなわち大日如来の悟りを本来の姿にもどすための院なのである。但し、ただ再統合するだけではない、重要なことは衆生に直接理解可能な姿で再統合することなのである。つまりこの第二重の院は、統合によって方便を究竟するための院なのである。初重と第二重の院で活躍している諸尊は、方便を究竟するために出現した中尊大日如来の変化法身である。

第二重の院を四方からぐるりと取り囲んでいるどこにも仕切り線のない院、但し四方に門はあるけれども一体構造になっている一番外側の院が第三重の院である。この院は最外院とも外金剛部院とも呼ばれている。この院は、「大日経」の『入真言門住信品第一の七』で説かれている大日如来のことば「菩提心を因と為し、大悲心を根本と為し、方便を究竟す」ることによって済度された衆生の世界である。大日如来によって等流法身として生まれかわった衆生の住まう世界である。この院は、現実世界における仏国土であり、この院の建立と拡大こそが中尊大日如来の本誓だったのである。

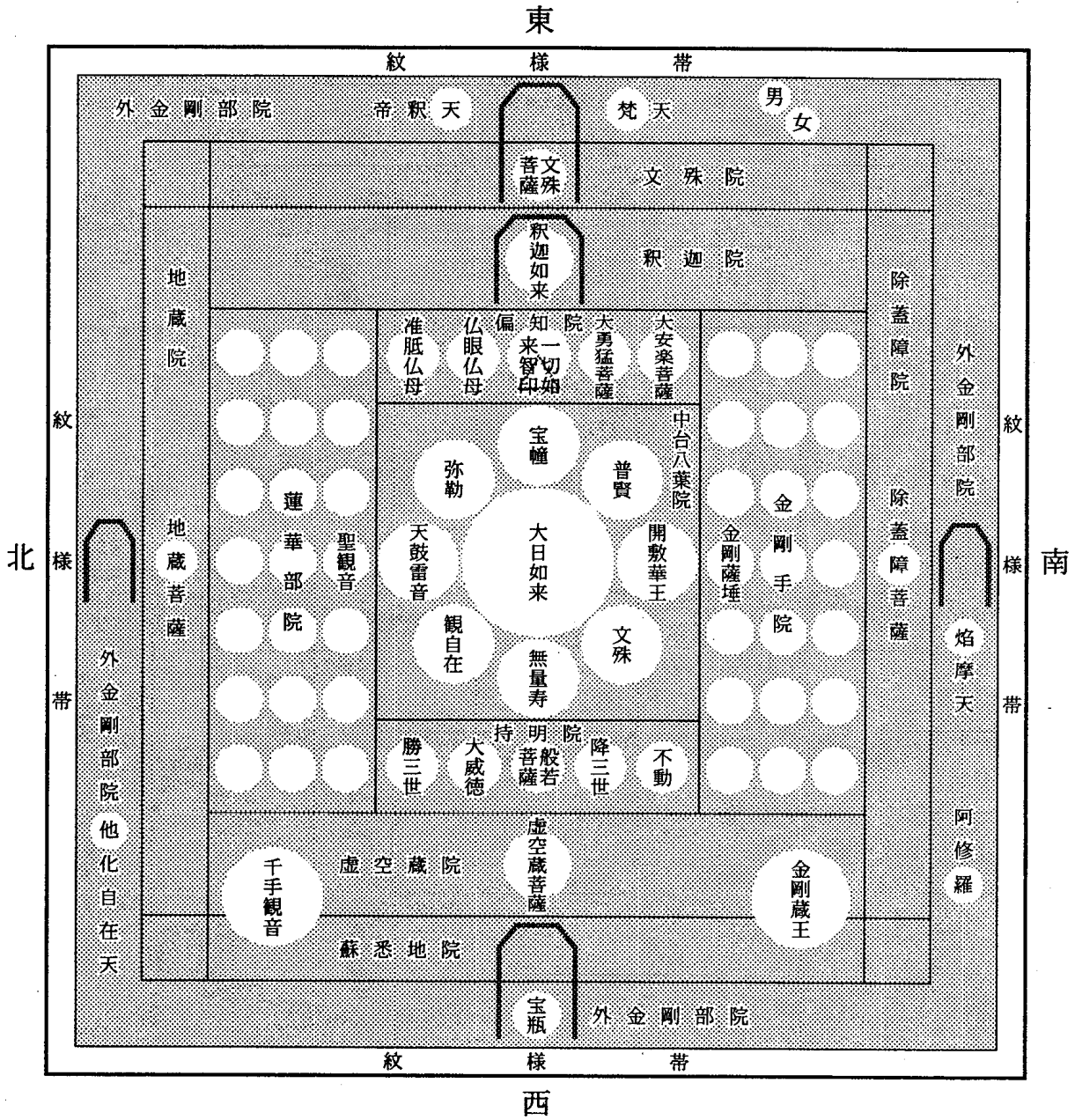
胎蔵マンダラは、以上の12の院によって構成され、結界されている。しかし、閉鎖はされていない。最外院の西門は、マンダラの外の世界に通じている門なのである。この門の中には、最外院の主尊である法瓶が配置されている。法瓶は仏法そのものである。この門は、以前には仏法と無縁であった者が、縁あって仏法に済度され、等流法身に変身して仏法の世界に入る時、通る法門なのである。この門は仏教を守護する最強の龍王である難陀龍王と烏波難陀龍王によって守護され、更に不可越を意味する対面天と難波天によって固く守護されている。仏法に縁なき衆生は、この門を通ることは不可能なのである。

第1図 胎藏曼陀羅 (元禄本)



石田尚豊著「両界曼陀羅の知慧」(東京美術)

第2図 胎藏曼陀羅略図



第2章 「ジム・クノッフと荒くれ13」のマンダラ図

2-1 本尊と中台院の構造

「ジム・クノッフと荒くれ13」をマンダラ図で表わす作業を始めるに当たってまず本尊は何か、本尊のいる中台院はどのような構造になるのか、これを決定する作業から始めなければならない。つまり、この物語の中からこのマンダラ全体の本尊を探し出さなければならないのである。

ここで一つ断っておかなければならない。「ジム・クノッフと荒くれ13」は、ミステリック・ファンタジーなのである。本尊はなにかということはマンダラ図においては最も大切な問題で、まずこれが確定できないことにはマンダラ図作製の緒にさえつくことができないのである。ところが、この本尊となるべき尊格は、この物語においても最大の黒幕で、大団円を迎えるまでその姿を現さないのである。従って、この物語の筋に従って本尊を探して行く場合、迷走せざるを得ないのである。

では迷走を始めることにしよう。

この物語の始まりは、雨の日、ルマー国のヴァース婦人の小さな店の中。ジムとリ・シがヴァース婦人の台所の食卓に座って、ヴァース婦人にわくわくするような物語を読んでもらっている。そこへ仕事を終わったルーカスが入ってくる。

„Guten Tag, Lukas!“ sagte Jim und strahlte.

„Guten Tag, *Kollege*!“ antwortete Lukas⁽¹⁶⁾.

「今日は、ルーカス！」と言ってジムは顔を輝かせた。

「今日は、*同僚*！」と、ルーカスは答えた。

ここで原文を引用したのは理由がある。ジムに対する呼びかけの言葉 *Kollege* がイタリックになっているのである。これは尋常でない。エンデは、何かサインを出している。そのサインの意味はまだわからない。ともかく、ジムもルーカスも蒸気機関車の運転手なのである。ルーカスを交えて話がはずむ。

「ずっと前から聞こうと思っていたんだがね、リ・シ。」ルーカスはゆったりとパイプに火をつけてから話し始めた。「あの竜マルツァーンは今いったいどんな具合になってるかね？」

「彼はまだぐっすり眠り続けているわ。」小さな姫は小鳥の声のようなかわいらしい声で答えた。「でもとっても不思議に見えるの。純金でできてい

